

岩瀬 報

発行責任者 須田 元大

編集責任者 中野 直人

自己有用感を育てると言うこと

須賀川市立第三小学校長 須田 元大

ラグビーのワールドカップが開催されている。

この原稿が印刷される頃には、ジャパンの悲願であるベスト8入りができたか結果が出た頃かと思う。私は、学生の頃からラグビーが好きである。もちろんプレーはしない。もっぱら観戦する方である。学生時代は毎年、12月の最初の日曜日は旧国立競技場で大きな試合があり、サークル全員分の席を取るために前夜から徹夜で並んでいたことを思い出す。ゲームが始まり、最前列から振り返ると、そそり立つ壁のように見えた5万人以上の人が発する声援や歓声、ため息は、再生することが困難な臨場感と表現されるそのものだった。

さて、ラグビーの素晴らしさは「all for one, one for all」「ひとりみんなのために、みんなはひとりのために」で表される。この言葉が出てくるたびに、私の頭に「自己有用感」という言葉がうかぶ。

国立教育政策研究所が出した「生徒指導リーフ 18」の中に「自尊感情と自己有用感の違い」について以下の記載がある。

自己有用感とは、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、等の相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等の語とは違います。

日本では、児童生徒の「規範意識」の重要性も強調されています。それらを併せて考えるなら、「自尊感情」より「自己有用感」の育成をめざす方が適当と言えるでしょう。なぜなら、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価だからです。

まとめとして

- ①日本の児童生徒の場合は、他者からの評価が大きく影響する。
- ②「ほめて（自信を持たせて）育てる」という発想よりも「認められて（自信を持って）育つ」という発想の方が、子どもの自信が持続しやすい。
- ③他者の存在を前提としない自己評価は社会性に結びつくとは限らない
- ④「自己有用感」に裏付けされた「自尊感情」が大切

このことに共感して以来、私は学校経営の柱の一つに「自己有用感の育成」を挙げて、最初の職員会議で教職員に話をしている。

「他者とかかわり、人の役に立った、人から感謝された、人から認められたことに喜びや価値を見出す子ども」が大人になり、社会の形成者となった時に、この閉塞した社会に風穴を開け今よりももっと住みやすい社会にしてくれると信じている。

山野草を眺める&草むしり（ワーク・ライフ・バランスを考える）

須賀川市立第二小学校長 正木義輝

何年前からだろうか。朝5時のアラームを聞くことなく目が覚める。冬の暗く寒い日も、薄暗い雨の日も、そして休日も同じであるから始末が悪い。

早春の福寿草からはじまり、バイカオウレン、イカリソウ、サクラソウ、エンレイソウ、山シャクヤクなど、約20種類の山野草が、次々に可憐な花を咲かせる。庭の木々や山野草を眺めて、ゆっくりと飲むコーヒーは至極の時間である。



山シャクヤク

「静」より「動」を好む自分の性格からは考えられないような時間の使い方であるが、これも「老い」のなせる業なのだろう。

昔から「早起きは三文の徳」と言われているが、高齢者にとってはそうではないらしい。オックスフォード大のケリー博士の研究に、『「早起き」すると寿命が縮む！』という研究がある。高齢者が朝早く起きてしまうのは、「メラトニン」という眠気を誘発するホルモンが加齢によって減少し、体力の低下がそのまま寝る力も奪ってしまっているからであり、高齢者は早寝早起きよりも『遅寝遅起き』のほうがずっと健康にいいのだそうである。私もそろそろ気をつけなければと思う。皆さんも十分にご注意を！



イカリソウ

山野草を眺めていて気になるのが「雑草」であり、根気強く「草むしり」に勤しむのだが、これもまた貴重な時間となっている。「何も考えない」でひたすら手を動かすのが「草むしり」なのだが、早朝で脳がリラックスしていて活性化しているのだろう。普段では浮かばないアイデアが思いがけず浮かんだり、忘れていたことをふと思い出したりすることがしばしばである。加齢による体の「老い」が私の生活リズムを変えている。

今、働き方改革が叫ばれる中で大事なことは、一人ひとりの教師が「自分の健康」を意識することである。熱心な教員が過労で亡くなったり、年間5,000人もの教員が休職を取ったりしているのが現状で、「自分は大丈夫」と誰が言えるのだろうか。特に、これまで子どもたちのためにと、自分の時間を割いてまで熱心に仕事をしてきた教員が命を落としているからこそ、「健康」を意識してほしい。

学校は、週休2日制の導入に伴って多くの行事や会議を精選し、これまでも教育効果から「学校がやるべきこと」を視点に行事の見直しを進めてきており削減も限界に達している。今後求められるのは、一人ひとりの教師が、限られた時間の中で「自分の生活（健康・命）」の維持のために、これまで行ってきた自分の仕事にメスを入れて削減していくしかないと思う。教師として情熱と誇りを持って行ってきた仕事を簡単に変えることはできないが、自分を大切にすることが子どもを大切にすることなのである。

教員の多忙化解消に携わってきた兵庫教育大学の武井敦史氏の失敗談を目にした。ある学校の多忙化解消の研修で、業務の見直しを教師ととことん議論し、結果2.5%にあたる年間6日間分の削減が出来たそうである。そこで武井氏が「削減できた時間をどのように使いますか。」と尋ねたところ、その学校の教師は「もう少しゆとりを持って仕事がしたい。」と答えたそうです。皆さんはどう考えますか。



『震災から8年、そして台風被災から想う』

須賀川市立西袋第一小学校長 星田 弘美

本校4年目を迎え、教職も残すところ1年5ヶ月となりました。

この36年間の教員生活を振り返ると、いろんな出来事がありました。

その最たる出来事は、やはり“東日本大震災”と直後の“東京電力福島第一原子力発電所の事故”であったと思います。あまりのこの重大さにより、県行政の機能、そして県教委の機能が麻痺し、身の周りの動きが停止してしまったように感じたものでした。そして、近年の西日本での台風被害。そうこうしているうちに、台風15号による千葉県等の被害、さらには、今回の台風19号の本県（本市）等の甚大なる被害。予想をはるかに上回る被害を受けました。本校関係者も床上や床下浸水の被害を受けた児童や教職員がおり、職場復帰にも相当の時間を要しました。

ところで、皆さんは、8年前の震災後、公共広告機構（ACジャパン）のテレビやラジオのCMで、1日に何度も放送されていた詩を覚えていますか？ 元高校教師である宮澤章二さんの「行為の意味」という詩でした。

【行為の意味】 宮澤章二「行為の意味 ～青春前期のきみたちへ～ より

あなたの「こころ」はどんな形ですかと、

ひとに聞かれても答えようがない ～中略～

確かに「こころ」はだれにも見えない

けれど「こころづかい」は見えるのだ

同じように胸の中の「思い」はだれにも見えない

けれど「思いやり」はだれにでも見える

それも人に対する行為なのだから

あたたかい心が あたたかい行為になり やさしい思いが やさしい行為になるとき

「心」も「思い」も 初めて美しく生きる それは 人が人として生きることだ



今回の台風被害を通して、8年前の震災後のことを思い出しました。周囲の方々との支え合い、見知らぬ方々からの支援。同僚教職員の献身的な復旧活動支援。

誰もが、被災現状に驚愕な思いを抱き、被災した方々への同情と早期の復旧の願いを持ったことと思います。しかしながら、これらの現状と日々の生活の様子を振り返ったとき、自分の思いと実際の行動との違いに気づいてしまうのです。

「心」や「思い」を行為として行動に移していかなければ、何の意味にもならず、ましてや『ホスピタリティ』の精神には届かないのだと再認識しました。

日々の学校経営において、人が人として生きることが出来る教職員集団でありたい、そして、その姿で子どもたちを導いていきたいと考える今日この頃です。



「ほんとうにその言い方で伝わるの？」

須賀川市立西袋第二小学校長 本多 淳嗣

「ほんとうにその言い方で伝わるの？」

教頭時代にお仕えした校長先生が、よく口にされていた言葉である。その子の発達
の特性を理解して言葉かけをしないとダメ
なんだということなのだが、“あの子”には
伝わっても、“この子”には伝わらないとい
うことがよくあった。ほんとうにその子を
理解しようとしていなければ、適切な言葉かけや指導ができないということを身にし
みて感じさせられた。



声の音量、速さ、トーン、間の取り方などなど……。
そのうち一つが違っていても正しく伝わらないことがある。
自分がイライラしながら感情のままに話しているよ
うなときには、まったく受け入れてもらえない。ひと息も
ふた息もついて心を穏やかにしなければならないことを

学ばせてもらった。

これは、発達の特性を持った子どもに対してだけではなく、どの子にもあてはまる
私たちに必要なスキルなのである。自分がかけた言葉が、相手にどう伝わって、どう
理解されているのかは、一様ではない。そんなつもりで言ったのではないのに……。
というトラブルもよく耳にするところである。

子どもたちにはもちろんのこと、校長として職員にかける言葉についても、振り返
って考えなくてはならないと反省している。職員一人一人の経験や家庭環境、仕事上
でのストレスなどは、それぞれ違っている。かける
言葉の内容やタイミング、口調など、これまでに
様々な子どもたちとふれ合って学んだことを生か
していけるよう、自分自身の心に余裕を持ちながら
学校生活を送りたいと思っている。



「新採教員をやめさせない！」

須賀川市立小中一貫教育校 稲田学園 校長 八木沼孝夫

今年で57歳（いつの間にか）となり、教職人生も今年度末には残り3年となってしまいました。最近、強く意識していることが、これからの学校現場を支え担っていく管理職や校内のミドルリーダー、そして若手教員などの人材育成です。教職員の大量退職時代の現在、管理職や若手教員の育成はまったなしの喫緊の課題でもあります。そんな中、私が定期購読している教育雑誌の8月号の見出しは“新採教員をやめさせない”というショッキングな見出しでした。

実は私には苦い思い出があります。今から30年以上前の東京の初任校に勤務していた時の話であります。就職浪人を経て念願の中学校社会科教員としてがんばっていましたが、勤務していた中学校は次第に校内が荒れはじめ、あっという間に生徒指導困難校となってしまいました。校内で一番若い教員である私は、教職員側の“特攻隊長”として、荒れた生徒と対峙しなければならず、心は次第に疲弊していきました。管理職からの適切な支援や指導もなく、先輩や同僚も目の前の対応に追われていて、自分から「SOS」を発信することができなかつたのです。そんなある日、出勤しようとしても、駅の改札を通過することができずに、改札の前でしばらくウロウロしていたと思いますが、駅の公衆電話から職場に電話をして“ズル休み”をしてしまいました。“ズル休み”という後ろめたさもあったので、アパートにも戻れず、時間つぶしに映画を見たり（伊丹十三監督の『マルサの女』だったと思うが全くストーリーは覚えていない）、公園のベンチに座って煙草をふかしたりしていました。そんな時「辞めようかな？」と真剣に思いました。その後何度か“ズル休み”を繰り返しながら、「辞める勇気もなく」暗くてつらい教員生活を送っていました。

年度末の人事異動で、私は過員解消の対象となり次の勤務校に転出となりました。転出先は都内の下町にある“荒れた学校”で有名な中学校です。また前任校と同じように苦しい教員生活が待っているのかと思いつながらブルーな気持ちで赴任しました。しかし、その学校は、職員室に活気があり、管理職も常に笑顔で職員に接していました。勤務初日から、所属となった学年の先生方から飲み誘われて、終電近くまで美味しいお酒を飲むことができました。そんな雰囲気のある学校ですから、生徒指導上の問題は毎日のように起きていましたが、先生方がスクラムを組んで問題に対応し、手のかかる子ども達にも寄り添いながらきめ細かく接していました。そんな同僚に助けられながら、次第に私は教員として自信が持てるようになってきました。もし、この2校目の下町の“荒れた学校”に勤務していなかったら、恐らく私は教員を辞めていて、今こうしてこの原稿を書いていることはなかったことでしょう。

同じ都内の中学校で、同じような子ども達を相手にしていても、この2つの中学校の大きな違いは、教職員の同僚性であり、その同僚性を笑顔で支えている管理職の姿勢ではないかと思えます。

近年の教員採用試験の倍率が低くなってきて、それに伴い、新採教員の質の問題が指摘されていますが、果たしてそうでしょうか？現在、学校現場は“ブラック”なイメージでとらえられているとともに、各種調査でも教員の超過勤務の多さが指摘され、教員の働き方改革・多忙化解消が叫ばれています。また、少子化等による他業種との人材確保競争も激化しています。そのような状況の中で、“どうしても教員になりたい”という強い信念や熱意を持った人が受験し、新採教員として学校現場に配置されてきていると思われれます。しかし、新採教員のうち、条件付任用期間を終えた段階で「依願退職」を選んだ人が2017年度調査で377人（採用者数の1.24%）にもものぼり、その30%程度（106人）は精神科疾患が理由であるとも言われています。

最近の若者は、指示をされないと動けなったり、積極的にコミュニケーションをとったりしない人が多いかもしれません。「最近の若者は」「今どきの若いヤツは」というフレーズはいつの時代も常套句でもあり、そんな若者を育ててきたのは、我々学校関係者もその一員であります。これからの学校教育を担う貴重な人材を辞めさせない・病めさせない・休ませないことは、補充者がいない現状の中では、若手教員に限らず、教員のメンタルヘルスの観点からも、校長の職務の重要な一つであります。

30年以上も前に一度教員を辞めようと思った私が救われたのは、同僚性の高い職場であり、それを笑顔で支えていた管理職の学校経営であることは間違いありません。それは現在の学校現場でも同じであります。残り短くなってきた教職人生、教員を孤立させず、相談しやすい雰囲気を校内に醸成するなど、同僚性を高めながら、「子どもの笑顔と、教職員の自信が満ちあふれ、保護者から



『教師の命は「授業」である』の真の意味

須賀川市立阿武隈小学校長 平原 信男

もう、あと1年と数か月で教職人生も終わりを告げる年となってきました。若いころは、授業をうまく行うにはどうしたらよいかと本を読んだり、研究会に参加したり、論文を書いたりしました。自分なりによく頑張った時期がありました。その原動力は「教師の命は、授業である」「教師は授業で勝負する」という偉い人の言葉でした。子どもと向き合っている時間の総時数がほかのどの時間よりも多いということが、授業が一番大事であるという理由でした。授業をうまくやること、「わかる、できる授業」をつくること、指導のプロであることへの向上心を絶えず持つこと etc.

しかし、学校経営の長となり、そろそろ退職となる年になって、この『教師の命は「授業」』という言葉の意味が変化してきていることに気づきました。しかもこの2、3年で変化に確信が生まれました。ある方との出会いでした。氏は、次のような文章を残しています。

教師が一人ひとり子どもをかけがえのない存在として大切に思い、子ども一人ひとりに心配って豊かに学べるように努力するやさしい教師の心はいち早く子どもに伝わり、子どもたち自身も一人ひとりの友達をかけがえのない学びの仲間として大切にすることを学ぶのだ。

友だちの発言に耳を傾けることもなく、せせら笑ったり、軽蔑のまなざしで見つめたりする学級は「学び合っても高めあう風土」ができていないことを示している。その責任は、日々、子どもと一緒に生活し、授業を通して子どもに教師の心を伝えている教師にあるとわたしは思う。なぜなら、子どもたちがそのように友だちの学びを大切にしない「姿勢」を学んだのは「役割見本」である教師からだからである。

わたしは常日頃、「学校の生命は、授業」と考えている。また、授業は子どもが教科の学習内容を学ぶ時間であると同時に、教師にとっては、「積極的な生徒指導の場」であり、子どもを深く理解できる大切な「カウンセリングの場」だと考えている。教師が授業を進めるときに最も問われるのは、一人ひとりの子どもへの心配りである。それはカウンセリング・マインドそのものである。

授業における教師の心配りが学ぶ子ども一人ひとりに届けられているとき、子どもたちは安心して自分の考えや思いを伝え合う学びができる。子どもは日々の授業において教師が子どもとかわる姿、教師の子どもたちへの心配りの有り様から自分の友達とのかかわり方を学んでいる。

子どもたちはわたしたちの教師の姿を「役割見本」として学んでいることを肝に銘じていきたい。(『学びつづけて』宮前貢著より)

たとえ指導法が見事であっても、教育者としての教師の心が育っていなければ、教室には一人ひとりが学べる環境が生まれません。「授業が命」といわれるのは、多くの時間を費やす授業における教師の態度が子どもを育てるからなのです。教室における教育者としての自分の在り方が大切になってくるということを今になって知らされ反省させられました。今は校長室で仏様のようにいつもニコニコしていようと努力していますが、まだまだです。

子どもたちの自己マネジメント力を高める！

須賀川市立大東小学校 古川 久枝

二学期が始まり、子どもたちの元気なあいさつの声が響き渡っています。なんてかわいい子どもたちなんだろう……。そんな子どもたちに、たくさんの力をつけてあげたいと思っています。

二学期の始業式に、子どもたちに2つの頑張ることを話しました。

一つは、「すてきな大東地区をさらにみんなですてきにしていこう」ということ、そして、もう一つは、「自分で自分を変えていく力をつけていこう」という話です。

今年度、学校目標達成ビジョンの目指す子ども像に、「地域を愛し、これからの社会に必要な資質・能力（自己マネジメント力、協働する力、実践力）を身に付け発揮し解決する子ども」を掲げ、達成に向けて取り組んでいます。始業式に話をした「自分で自分を変えていく力」は、「自己マネジメント力」のことです。

中国の故事に、「魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ。」という格言があります。魚をいくら与えてあげても食べてしまったら飢えてしまいますが、魚の釣り方を教えてやれば飢えることはありません。私達が子どもたちにつけたい力は、魚をとる方法や、魚を釣る楽しさや、魚に対する興味関心や魚を釣ろうとする意欲です。学習で言えば、学習を身につける方法、学習の楽しさ、学習に対する興味関心、学習に取り組もうとする意欲です。

子どもたちが学ぶ内容も大切ですが、それ以上に目的や方法が大切だと考えます。それを身につけることにより、少しずつ、自分で様々なことに取り組み、目的に合わせて自分を高めていくことができます。そして、それが自分の夢の実現や社会に貢献することにつながっていきます。大東小学校では、様々な教育活動の中で、そのような力を身につけることができるような仕組みづくりをおこなっています。

授業をはじめ、すべての教育活動で、自己マネジメント力の育成を目指していますが、今年度から始めた朝のボランティア活動（朝ボラ）と漢字コンテスト・計算コンテストでは、自己マネジメント力の育成を目的として全校で取り組んでいます。

8時になると、一人一人が学校をよりよくしていくために何をしたらよいかを考え、思い思いに活動を始めます。清掃活動が主ですが、黙々と頑張る子どもが増えてきました。漢字コンテスト・計算コンテストでは、1週間前のテスト範囲予告から目標をもって計画的に取り組み、努力し、満点を目指しています。全校オリエンテーションを行って何のためにやるのかを児童と共有し、スモールステップで行うことで児童に達成感をもたせ、自己効力感や子どもたちが自分で自分を変えていく力を高めていきたいと考えています。



朝のボランティア活動



計算コンテストに取り組む子どもたち

教育活動を充実させていくためには、多忙化の解消や地域との連携など、様々な課題があります。職員とともに、同じ志をもって精いっぱい努力していきたいと思えます。

長沼小学校の自慢は、何といっても子ども達

須賀川市立長沼小学校長 積田 育子

何気ない日々の出来事の中に、当たり前と見過ごしてしまうにはもったいない、素敵なエピソードがあふれています。学校だよりに載せた中からいくつかを紹介します。

～いいことが広がります～

1年生が2年生と一緒に学校探検をした時のこと。脱いだ靴をそろえてパソコン室に入った2年生のNさんのしぐさが自然だったので、「みなさんもNさんのようにできるといいね」と声をかけたところ、全員がきれいに靴をそろえ直すことができましたということです。最初に靴をそろえたNさんがすばらしいですし、いいと思ったことをすぐに真似できる、きれいな心を持った子どもたちもすばらしい。学校にいいことが広がります。

～雨上りの月曜の朝～

6年生の男子5名が、廊下をせっせと雑巾がけしていました。聞くと、「水で濡れていたから危ないと思って」とのこと。誰に言われるともなく始めて静かに終わって教室へと帰っていったのでした。美しい。

～6年生 学級活動での出来事～

今までは、強く主張をする子の意見に押されて決まったり、多数決で決めたりすることもあった学級活動の話し合い。しかし、6月の話し合いでは、「〇〇君はそれ苦手だから」「それは2学期にもできるから」との意見がだされ、その時期に適した、最善の案にまとめることができたとのこと。自分のことだけでなく、友だちの（本人は言いにくいかもしれない）ことに気がまわり、今だけでなく、先のことを見通すことができる6年生。

この学校のリーダーである23名の精鋭達は、自慢の最上級生です。すばらしい。

ドラえものの誕生は2112年です。令和を生きるこの子たちは、本物のドラえもんにも会えるかもしれない…。そんな風に時代が変化しようとも、思いやりや愛、温かさは未来永劫変わるものではないと信じます。自慢のこの子たちが、今以上に輝きを増して自信をもって未来を切り拓いていけるよう全力を尽くします。

できるのならば、大人になったこの子たちが、ドラえもんを取り合っとうれし涙を流すところを見たいなあ…。

～命を守る尊い行為～

予告なしの避難訓練のこと。校庭で非常ベルに驚いた下級生から話し声が聞こえるや否や「しゃべらないで!」「しゃがんで!」と一喝する大声が。その声の主は6年生の3人の女子でした。

その一喝は、自分だけでなく、多くの人の「命を守る」尊い行為です。

～上級生から引き継いで～

1～3年生の遠足。郡山カルチャーパークでの活動は、1～3年生縦割り班で行動する約束でした。ここでは3年生が最上級生。すると、3年生は、声をかけて下級生を整列させたり、「トイレに行きたい人は?」と気を配ったりとすっかり頼れるお兄さん、お姉さんになっていたそうです。普段の5、6年生のお手本が、下級生にちゃんといかされています。長沼小学校の人と人とのつながりは、宝物です。

～マラソン大会のエピソード～

低学年が一生懸命に走る前を伴走する6年生。前に行く同級生たちに遅れてしまった子のペースに合わせて励ましの声をかけながら少し前を走ります。6年生にこのことをお願いした先生はいません。まして、6年生は、これから自分たちのレースが控えているというのに…。素敵です。

さりげない優しさ、思いやりが長沼小にはあふれています。



新任校長としての思い・・・

鏡石町立第二小学校長 遠藤 佳子

「おかえりなさい。」4月3日の岩瀬地区小・中学校長協議会総会でかけていただいた言葉です。新任の教頭として着任したのが須賀川市立柏城小学校。当時、教頭会でお世話になった方々が先輩校長先生として迎えてくださったのです。初めて勤務する鏡石町。慣れない地域と慣れない立場での不安感の中での温かい言葉に、ぐっとくるものがありました。また、このご縁に感謝の気持ちで一杯になりました。

本校に着任して2か月あまり。新任の私が困らないようにと、前任の校長先生が様々な準備をしていてくださいました。文書、要項は分かりやすくファイリングされ、各種資料、情報もきっちりと残してくださり、感謝の毎日を送っています。また、素直で明るい140名の子どもたち、意欲と優しさにあふれた教職員、協力的な保護者と地域の皆様。とても恵まれた環境の中で校長職をスタートできたことに、これまた、感謝の毎日です。

教頭時代を振り返ると、責任を持って仕事をしていたと思っていましたが、校長となり「責任」の意味合いの違いとその重さに戸惑っています。隣を見ても誰もいない（昨年度までは教務主任、事務職員がいたのに）、振り返っても誰もいない（昨年度までは校長先生に相談できたのに）…。「責任」の重さをひしひしと感じています。

校長として職務にあたることができるまで、たくさんの校長先生から多方面にわたりご指導いただきました。今の自分があるのは、自分だけの力ではないということ、常に感謝の気持ちを持って学校経営にあたっていきたいと思います。

「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味を持つ、新年号「令和」の始まりです。教職員、保護者、地域の方々と心を寄せ合い、「子供が安心して学べる学校」「今日来てよかった、そして、明日学校に来たいと思う学校」づくりを行っていききたいと思います。また、「教職員が安心して前向きに働ける学校」を目指し、校長として何ができるのか、何をすべきかを常に考え、日々研鑽しなければならないと強く思っています。

教頭として育てていただき、教頭としての大切なことを学ばせていただいた岩瀬地区で再び勤務することの喜びをかみしめながら、今度は、少しでもお役に立ちたいと思っています。新任校長として精一杯頑張っていきますので、ご指導よろしく願いいたします。



【写真 ガラスモザイク壁画「太陽と緑と土」】

～子どもたちの健やかな成長を願って～

「当たり前で環境で学べることの幸せを感じて」

天栄村立広戸小学校長 緑川 喜久

明るく雰囲気の良い職場、素直で元気いっぱいの子どもたちとの出会いに「やっぱり学校はいいなあ」と感じた4月。初めて迎えた授業参観では、ほとんどの保護者がPTA総会に残っており、保護者の子どもたちに寄せる思いと学校への期待の強さを感じました。あれから2ヶ月が過ぎ、運動会も無事に終わり、落ち着きを取り戻した学校では、子どもたちが先生方とともに、学習に熱心に取り組んでいます。



私は、昨年まで縁あって福島県文化スポーツ局生涯学習課に勤めておりました。そこでは、東日本

大震災・原子力災害の記憶と記録を後世につなぐアーカイブ拠点施設の整備に関わり、福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター」の3名の特任教授の先生が行う、震災や原発に関わる資料の収集をサポートしていました。それらの活動のなかで、未だに町民が帰還することができない双葉町や一部帰還できない富岡町・大熊町・浪江町の帰還困難区域内に入ることが何度ありました。そこには、伸び放題になり、道路まではみ出している庭木や泥棒や動物に内部を荒らされた住宅、イノシシが我が物顔に歩く姿、草が伸び放題になっている学校の校庭など、信じられない光景が広がっていました。昨年



年から、ようやく帰還困難区域内の建物の撤去が始まり、町は、特定復興再生拠点区域として、2020年の避難区域解除に向けて整備が進められています。

岩瀬地区も震災により大きな被害があり、本校も校舎にクラックが入るなどしました。また、各学校では除染等の取組みもなされ、地域によっては道路や家屋、その敷地まで除染が行われました。震災から8年が経過した今では、震災前のような生活が当たり前に行うことができるようになり、大震災があったことも記憶から薄れてきているように思います。学校生活もほとんどが元通りのように行うことができるようになっています。しかし、双葉地方では、極少人数教育となっており、震災前の状況からは考えられない教育環境となっていることを考えると、震災前のような「当たり前で環境で学べる」ことに感謝せずにはいられません。子どもたちには、今の環境で学べるのが「幸せなことなんだ」ということを改めて考えさせることが大切なのではないかと感じています。

2020年夏には、双葉町に震災の記憶と記録を後世につなぐ施設「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設」が完成します。ぜひ、訪れてみてはいかがでしょうか。

【アーカイブ施設イメージ】＊福島県生涯学習課のHPより

